

1 自己評価及び外部評価結果

(別紙4)

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2491300253		
法人名	有限会社 徳寿苑		
事業所名	グループホーム寿の家希中央		
所在地	三重県名張市希中央5番町112		
自己評価作成日	令和5年10月25日	評価結果市町提出日	

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaisokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=kouhvu_detail_022_kani=true&JigovsoCd=2491300253-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	令和5年11月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

常に満床で、年に1人2人の利用者が入れ替わる位で、ほぼ対象者の変化がない中、日々満足してもらえるよう職員も家族のように接する事を心掛け対応している。コロナで地域との関わりが遮断された時期もあったが、これからはまた地域の行事にも積極的に参加し、地域との連携につなげていきたい。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

認知症の高齢者が、介護する職員といっしょに、楽しく暮らしていけるグループホームを開設したいと、事業主夫婦の希望を種子島で実現し定着させた。連れ合いの出身地の三重県にも近鉄名張駅近くにホームを2か所開設し、互いに協力し合って事業を展開し地域に根付いている。遠隔地の事業所とも交流し、当日は種子島から届いた安納芋をおやつに食して、和気あいあいのひと時を過ごした。職員は午前と午後にお茶会の時間を設けて、休憩を兼ねて業務や利用者のケアについて自由に話し合い、業務に活かしている。職員同士が仲良く、支えあっている実感があると職員が告げ、調理専任の職員、体操やレクリエーション、介助に当たる職員達がにこやかに利用者へ接し、楽しく働いている様子が伺えた。利用者は、手作りおやつやお餅作りや壁面飾りの製作活動等に取り組んでいるが、職員が手を出さず、見栄えよりも利用者の力でやれるように後方支援に心掛けている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目: 23, 24, 25)	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目: 9, 10, 19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目: 18, 38)	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目: 2, 20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目: 38)	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目: 4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目: 36, 37)	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目: 11, 12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目: 49)	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごさせている (参考項目: 30, 31)	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目: 28)		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「小さな福祉の積み重ね」の理念のもと、「ゆっくり、いっしょに、たのしく」を意識し入居者が穏やかに家族に近い雰囲気の中で過ごせるように努めている。	開設当初に創設者の思いを事業所共通の理念とし、職員が制作した理念を織り込んだ壁掛けを玄関に掲げ周知を図っている。諸活動を行う際に職員が手を出すことを控え、ゆっくり、たのしく利用者の力でやれるように心掛けている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近くに公園があり、散歩の時など「挨拶」をしたり、会話を楽しんでいる。また地域の行事にも積極的に参加している。	市役所やまちの保健室が近く、以前は催しものに参加して地域住民と交流したが、利用者が重度化して参加が困難になっている。駅が近く、事業所のホールから電車や通行人が見えて生活感が感じられる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	利用者9名以外でも相談にのり、認知症はもちろん介護保険制度等についても説明している。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	写真(希張だより)を見ながら、取り組みを紹介し、意見をもらい実際のケアに活かしている。行政や町の保健室との意見交換も大切にしている。	本年4月より従来通り2か月毎に集合による運営推進会議を開会している。メンバーは家族代表、地域住民、民生委員、市・まちの保健室職員、事業所代表と職員等であり、家族が介護経験を話して認知症介護の理解を訴えたり、防災について意見交換を交わし、マニュアル作成に活かしたいと考えている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	介護保険担当、福祉事務所、包括支援センターとの連携はもちろん認知症についての講義を実施した。また運営推進会議でも意見交換を行っている。	コロナ感染防止対策に関しては、市の高齢・障害支援室やまちの保健室と連絡調整を密にして助言や情報提供を得て対応をした。日常的には管理者が市の窓口に出向き利用者の介護認定更新申請の代行をした際に担当者に事業所の報告や相談をし助言等を得ている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束委員会を開催し、拘束が必要か話し合い職員会議で検討している。	毎月1回職員会議を開き、身体拘束廃止に向けて話し合う機会を設けている。年間の職員研修計画を作成し、認知症の理解、虐待防止、身体拘束廃止に向けたケア、ヒヤリハットの書き方等についての研修会を計画し実行している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員会議、ケース会議で話し合い、常にケアを見直し、絶対に虐待が起こらないように、意識している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるように支援している	現在対象者はいないが、必要時には社協や市への相談ができるようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約前に施設内を見学をしてもらい、入居時の説明後、入居の検討をしてもらっている。そのうえで不安や疑問に思っていることを尋ね、対応・説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時に、生活の現状など話し合いを行い、家族の意見を聞くようにしている。些細なことでも説明し、会話から会話が生まれるよう話の場を大切にしている。	コロナ禍に於いて、面会が十分に実施できなかった時があり、家族に出来るだけ迅速に、適切に利用者の状態を伝える方策として、携帯電話のラインと動画で送信することを管理者が家族に提案したら3～4家族の賛同があり実行し、家族からの要望ではないが継続している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議はもちろんのこと、なんでもノート、お茶休憩等の時間を使い意見交換を図っている。	職員の雇用は多くが1年契約であり、年度末には代表者と個別に面談を実施し、その際に処遇や業務に関する思いを告げている。代表は職員の資質向上を奨励しており、研修参加や資格取得に要する経費を事業所が負担することがある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	パート職員が多いことから休み希望を聞き、働きやすい環境づくりを心掛けている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	月1回の職員会議時に指導を行う。入居者の既往歴などを通して勉強会に結び付けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者との交流はできていない。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居者、家族とケアマネが情報交換をして、十分にアセスメントを行い、良い関係づくりができるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族が気軽に訪れやすい環境を作り、面会時に家族と話をできるように努めている。また、変化があれば、こまめに電話で報告するようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	個々の入居者、家族と話し合いを行い、必要であれば介護保険外でのサービス等も説明し、実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	一緒に生活する仲間として、残存機能を活かし家事や作業を一緒に行うことでコミュニケーションを図り、関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	定期的に家族と連絡をとり、入居者の近況報告をしている。家族の考える介護方針や要望も確認するようにしている。2カ月に1回、日々の様子を伝える希張だよりを発行している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	高齢者の移住地にて、あまり馴染みが薄い様で、家族との面会や普段の生活の中で、会話を通して昔を思い浮かべてもらう。	大半の利用者は、地域に関する馴染みが薄く、近くで馴染みの人や場所等を尋ねても返答が乏しい。若い頃に過ごした大阪の話をし、共通の地で過ごした利用者同士集い昔を思い出し話が弾むよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	アセスメントや日々の日常生活で知りえた個々の性格を職員で共有、把握して入居者同士のコミュニケーションをサポートしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	医療機関への移行時は、情報把握のため定期的に訪問している。他施設への入所については、情報の共有や経過を聞くことで支援している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の希望、意向を聞き出すようにアセスメントを行っている。意思疎通が困難な場合は、家族からの聞き取りを行い支援している。	職員が利用者と個別に関わる入浴や排泄介助の際に会話を充分にするように心がけている。知り得た利用者の思いや意向は毎月のケース会議で報告したり、職員のお茶会の際に情報を伝達し、職員間の共通認識を図っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族から生活歴や今までのサービスを聞き取り、個々に合わせたサービスが提供できるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日常生活の状態や心身状況を、ケース会議等を通して職員全体で把握できるようにしている。また、医療機関や家族からも情報を収集して把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族を含めた担当者会議を行い、意向や希望を聞き取り介護計画を作成するようにしている。	介護支援専門員が作成した介護計画を基に、毎月の職員会議の中でケア会議を開き、全職員でモニタリングを実施し、ケア内容を検討している。計画は6か月毎に見直し、状態変化が見られたらその都度変更している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別にバイタル表を記録。また、個々の介護経過記録は、細かいことでも記録していくよう努めており、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者や家族の状況に応じて、急な受診や不足品の買い出しなど、家族と相談のもと行っている。また、施設外のサービスを希望された場合でも、可能な限り協力体制を整えるよう努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	自治会活動を中心に、地域の防災訓練にも参加し、安全に過ごせるよう工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族の希望を受け入れ、担当医との話し合いの場を持ち、適切な医療を受けられるよう支援している。	現在全員が事業所の協力医をかかりつけ医と決め、来年からは訪問診療にて受診する。2名のパート看護師を配し、利用者の健康管理や職員への助言、体調不良時の看護と主治医への連絡調整を担っている。歯科、皮膚科等他科受診は家族の協力を得て通院している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	受診には、介護職員がなるべくついていき、直接医師・看護師に指示を受けるようにしている。体調不良の入居者に対し、電話で指示を受けるなど協力体制をとっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入居者の施設での生活状況や病歴等情報を交換し、施設と家族・病院と連絡をこまめに取り合うようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重症化や終末期のケアの方針を家族、担当医と話し合いを行い、事業所でできること、医療機関でできることを考慮して方針を決めている。	開設当初から看取りケアを実践し、今年は3月に1件対応した。看取りケアは協力医を中心として、家族・看護師・介護職員がチームで対応をしている。重度化や終末期の対応について家族の意向は、入居当初に伺うのは控え、信頼関係形成時点で話し合うようにし、本人・家族の意向に沿って方針を決めている。最寄りの特養ホームとも連携している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応マニュアルを職員が閲覧できるようにしている。緊急時の対応について、職員会議等で随時確認している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、消防訓練を消防署指導のもと行っている。また、災害時に地域の方に協力を得られるように同意を得ている。	今年5月と11月に火災と地震を想定した通報と利用者の避難誘導訓練を実施した。運営推進会議に於いても防災と避難に関するアニュアル作成について話し合い、自治会へ協力を依頼した。職員は地域の防災訓練に参加している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人情報保護の誓約書を、就業時に書面にて作成している。また、職員会議等で言葉かけや対応について話し合いをしている。	管理者は職員に利用者と職員の間柄をわきまえて言葉遣いに注意をし、利用者の自尊心をそこなわないように配慮し、入浴や排泄介助の際には、利用者の羞恥心を配慮することを伝えている。接遇マナーの研修機会を設けている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	普段の生活の中で入居者の思いや希望を聞き取れるよう努めている。また、本人の意向をサポートすることで自己決定できるよう働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	健康的な生活リズムを乱さず、一人ひとりの希望を尊重し、充実した生活を送れるよう支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人や家族の希望に合わせ、対応している。希望時、美容室などへの外出支援も行う。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	季節の食材を使った食事の提供。イベント時には、行事食を考えて提供している。また、レクリエーションの一環として、一緒に作る機会も設けている。	調理専任の職員を配置し、利用者と会話をしながら旬の食材や冷蔵庫の食材を活用して毎日の献立を作成し、管理者が食材調達をしている。カスピ海ヨーグルトに手作りジャムを入れて、毎日朝・夕に提供し、行事食作りでは、昆布巻きや五平餅等を皆で作り食して楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	体重や消費カロリーに応じて食事量を設定している。また、定期的に体重測定をして適切かどうか確認している。水分量も毎回確認しており、摂取量が少ない時などは申し送りなどで共有し、補給できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	起床時、毎食後に口腔ケアを行っている。能力に応じて、自身で歯磨きをし、介助が必要な方には職員が対応し仕上げのケアを行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンを記録し、失敗しないように声掛けや誘導して自立を支援している。	大半の利用者が、入居前に自宅でリハビリパンツを着用していたが、入居後は適時に職員がトイレへ誘い、トイレでの排泄を支援しているため、布パンツと尿パットを着用しておむつの使用を減らし、排泄の自立支援を図っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘による発熱やイライラを理解し、処方薬と水分量の調整や食事の工夫で予防している。また、体を動かすことで予防に取り組んでいる。また、排便記録の確認をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	1日おきに入浴を実施している。また、入浴中にゆっくり職員とコミュニケーションをとり、楽しんでもらえるように努めている。	1日置きに入浴し、車いす対応の利用者は週に2回入浴機会を設けている。現在入浴を拒む利用者や、順番等でトラブル事もない。季節柄ゆず湯を楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の生活習慣や年齢、体調に応じて対応している。また、居室の空調や環境を整え、安眠できるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	かかりつけ医と話し合いを行い、薬の調整をしている。処方内容が変わったときには、内容や副作用などを全職員に申し送り、処方箋をすぐに見覧できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの生活歴や趣味を把握したうえで、料理の下ごしらえや洗濯物たたみなどの家事手伝いなどを一緒に行っている。また、個々の趣味が楽しめるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	町の中心地でもある場所なので、出来る限り戸外に出かける機会をとっている。	コロナ禍で十分な外出活動が出来なかった。日常的に、隣接の公園内を散歩したり、玄関前に出て野外で日光浴とお茶会を楽しんだ。駅の傍に事業所が建ち、ホールの窓から電車や通行人の姿が眺められて、街の風景が観えて生活感が感じられる。	今年コロナ感染症が5類と規定されたため、コロナ禍で十分にできなかった外出支援に機会を多く持ち、自然に触れたり、人と交流して楽しく活気ある生活が出来るように支援することを期待する。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	職員の中で所持について話し合いをしている。だが管理面での問題もあり、現在は本人がお金の所持はしていない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	来ていない。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間が構造上、狭いこともあり、中庭に出ることでリフレッシュできるような心掛けています。花や野菜を一緒に育てて楽しんでもらえるよう工夫している。	ホールは広く、明るく、丸テーブルが2つ配置されて、利用者が食事をしたり、製作活動やレクリエーションをして和やかである。キッチンが繋がっているため、職員は調理をしながら利用者と会話が出来たり、利用者は匂いや音で食事を待ちわびることが出来る。ホールの隅に広い洗面台が2か所あり、食後の口腔ケアが容易にできる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファや椅子、車いすを個々の体の機能に配慮して配置し、くつろげるよう工夫している。食事以外は特に席等を指定せず、色々な人と隣り合わせでお話する機会が持てるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人の使い慣れた家具や日用品を設置している。また、居室に家族写真や、職員と作った作品などを飾るなど工夫している。	居室入り口は引き戸で、小さなめ込みのガラス窓から居室内の利用者の様子を伺うことが出来る。室内は3方が腰高まで板張りになっていて落ち着いた雰囲気である。ベッドは事業所が提供し、布団等寝具は自宅から持参し、冬季には湯たんぽで寝床を温めて安眠でき、居心地よく過ごせるように配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設内のバリアフリー化、自立歩行の安全も確保している。廊下も広く、車いすや歩行器での移動も行いやすいようにしている。		